

「週末だから洗濯しなきゃ」

家事全般が嫌いだ。洗濯は嫌いじゃない。文明の利器はずぼらな私に優しく、洗剤を入れてボタンを押せばもう私に残された仕事はない。そうはいつでも部屋のあちこちに脱ぎっぱなしの服があるということは、その作業さえ億劫なことが乙女にはあるということだ。

誰に聞かせるでもない言い訳を頭の中で呟く。とうとう喉を震わせることさえ面倒になってしまったようだ。部屋の角に置いたベッドに寝転んだまま、両足を壁にもたげる。はげかかった。ペディキュアの色は克蘭ベリーレッドとかいったつけ。美味しそうな名前のせいでお腹がすいてきたので、冷やし中華でもつくろう。重い体をなんとか起こして、へたへたと素足のまま戸所へ向かう。フローリングは冷たくて気持ちがいいが、しばらく掃除機をかけていないせいで、足の裏にくっつく埃の感触がすこし煩わしい。そう思う度にスリッパを買うが、私に買われたスリッパはもれなくこの狭いワンルームの中で遭難し、救出される頃には新入りに仕事を奪われている、という運命なのだった。

「キュウリもハムもないじゃん」

自業自得なすっからかんの冷蔵庫の中身を、他人のせいのように語る。卵があるので、かろうじて素うどんならぬ素冷やし中華という寂しい昼食は回避できるな。

「きみーのなみだはふふふーん」

昨日寝る前に垂れ流していた知らない芸人と知らないアイドルのラジオで流れていた曲を口ずさむ。といってもサビの歌詞五文字程度しか知らないのだから鼻歌といったほうが正しいかもしれない。

キンキンに冷やしていたワンルームの扉を開け、一歩キッチンに踏み出すと生ぬるい空気からめとられるような感覚になり、料理したくないなと思ったが意を決してコンロの前に立つ。今流行りのアイエイチではなくガスコンロがたった一口。麺を先に茹でると伸びてしまうので、錦糸卵から作ろう。やっぱやめた、炒り卵でもいいや。味一緒だし。ボウルの中に卵を一つ割り、菜箸でかき混ぜる。コンロの火をつけるとただでさえ暑い廊下兼キッチンがより一層熱を増した気がした。またさっきの知らないラジオの曲を口から零しながら、心を無にして料理に集中する。心頭滅却すれば火もまた涼し、そんなことはうそだというのがわかった。

できた炒り卵を皿にとって、コンロをフライパンから鍋に譲る。並々注いだ湯はそうすぐには沸かないので、待つうちに疲れてきてそのまま床に座り込む。

「明日で二十歳、かあ」

久々に意味のある文を発したからかなんか不思議な気分がする。明日は八月三十一日、私の二十回目の誕生日だ。それにしても記念すべき十九歳最後の日の昼ごはんが、炒り卵トッピングオニリーの冷やし中華というのはいかがなものか。夜は食べないことも多いから、もしかしたら十九歳最後の、十代最後の食事になるかもしれないのに。

そうは思うもののスーパードに行こうという気にもならない自分の怠惰さに呆れてしまう。湯が沸騰し始めたので、再び灼熱のコンロ前に立ち、中華麺の袋を破いた。沸騰したお湯の熱気は容赦なく私の顔に直撃するので、鍋の中で踊り狂う麺を見つめるのはそうそうにリタイアしてタイマーをセットし、再び座り込む。それにしても暑い。ぼーっとしていたら急にトイレに行きたくなって、

いこうかなと思つたところでタイマーがなる。私が止めるまで健気に麵が茹で上がったことを知らせ続ける。そいつに煩わしさと愛しさを感じた。茹で終えた麵を鍋からざるにあげ、ざざと水道水で冷やす。本当だったら氷で冷やすとよくしまるのだがわざわざ冷蔵庫に行くのが面倒くさいので、その選択肢は頭の中で却下された。

「なんやかんや冷やし中華づくりというミツシヨンをクリアし、冷房の効いた部屋でテレビを見ながら麵をすする。」

「本当に私、ハタチになっちゃうのかなあ、明日」

休みの日には部屋から出なければ、長時間声を出さないで過ごしてしまうのは一人暮らしの弊害と言えるだろう。そのせいでしゃべり方を忘れそうになるので意識的に独り言を言ってみたりもする。私はずっと早く大人になりたかった。周りの女の子たちは大人になることを嫌がる人の方が多かったけれど、私は早く大人になりたかった。「もうハタチになっちゃう」と嘆いて見せる彼女たちは、どうしたら大人っぽく見えるかを一生懸命試行錯誤している私よりはるかにオトナに見えた。彼女たちになぜ二十歳になるのが嫌なの、と聞くと様々な理由を答えてくれた。

「去年制服でテーマパークいったけどさあ、ハタチ過ぎてやったらもうただのコスプレじゃん。イタいでしょ」

「コスプレどころかイメクラかも」

「日焼けも怪我の痕も全然治らなくなってるさ」

「私、もうすでに肌の潤いがなくなってきたんだけど」

「それは早すぎない？」

「やばいよね。なんかいいのいい？」

いつの間にかおすすめの導入化粧水やらオールインワングェルやらの話に脱線していく。彼女たちは今が人生のピークだと信じて疑わない。そしてこれからの人生が下り坂だということを甘んじて受け入れようとしている。悟っている。そのことがオトナになりたくない彼女たちをオトナにしているのだ。

思い出したように冷やし中華の麵をすする。うん、意外と悪くない。

オトナな彼女たちと違って私はそれを信じられなかった。ずっと二十歳になれば何かが変わると信じていた。

よく分からない不安とか、大人になれない焦りとか、子供にも大人にも入れてもらえない疎外感とか。そんなもの全部消え去って、全知全能にでもなれるような気がしていた。気がしていた、のだった。

でもその運命の日、二十歳の誕生日を明日に控えた今、その日がそんなに特別な日になるとは思えなくなっていた。奇跡や物事の転機が訪れるときにはたいがい前兆があるという。この前雑誌に出ていた、スピリチュアルセラピストいわく、例えば運命の人との出会いの前には、大切なものがなくなったり、鏡が割れたり、時計が壊れたりするそうだ。明日は待ちに待った「運命の日」だっというのに、何かが起こりそうな、台風の前の日みたいな空気がじゃない。それに運命の出会いくらいならまだしも超常現象的奇蹟なんかは私には起こせない。普通の人間は水をワインに変えられないし、海を真つ二つにできないし、手をかざしただけで病気を治せないし、水の上なんて歩けないし、ましてや死んでも復活なんてしない。

だからたかが二十回目の誕生日を経験したくらいで何が大きく変わるなんてことはないのだから。わかってる、分かっているけど。

ある時から私は、生きていけばいつか必ず二十歳になるということに縋って、それを唯一の道しるべかゴールみたいに思うことで生活を続けてきたような気さえするのだ。命の意味、限られた時間、年齢という概念、惰性の生活。こんな哲学的なこと考えるなんてらしくないな、と思う。木曜五限の哲学概論と同じくらいイミフメイだ。

「なんかもう、全部消えてみんな消えて」

金曜日ぶりにテレビの音量に負けないくらいの

「世界なんかなくなっちゃえばいいのにな」

思考を放棄した物騒な考えが口をついて出るほどには私の脳みそは者詰まっているらしい。

そんな風に柄にもなく小難しいことばかり考えていると、締め切ったワンルームに睡魔の御一行が到着した気配を感じる。冷やし中華はいつの間にか胃袋に吸い込まれ、皿に残ったのは汁だけだ。考え事をしながら食事をすると、食べたような気がしないので損をした気分になる。昼過ぎに起床したにも関わらず、脳みそは早く寝ろと指図してくるのでいよいよ私の体内時計は仕事を放棄したらしい。友人から貰わなければ我が家にやってくることはなかったであろう可愛らしい白の壁掛け時計の私と違った規則正しい針音が、柔らかく私の背をさすように響き、桃色の薄もやの中へと誘われるような感覚がある。ああ、無理だ。貴重な十九歳最後の日なのにもつたいないなあ、なんて妙に冷静に考えながらも、意識はほとんど沈みかけていた。ゆらゆらと暖かい海を漂うような感覚の中で、わずかなカーテンの隙間から見える昏い夕焼けの残滓がすうっと私の瞳にしみ込んでいくように感じていた。

おやすみ、と誰かが私に囁いた気がした。

「うう」

目覚め切っていない頭で無意識に布団を手繰り寄せようとするが、私が寝ているのは不幸にも床だった。壊れかけのブリキ人形みたいに、全身の関節がぎざぎざと音を立てて軋んでいるような気がする。無理やり体を起こしてスマホの画面を見ると、時刻は朝の九時十七分だった。私にしては上出来、そう思っただけ画面に目をやるとディスプレイには今日の日付が示されている。八月三十一日。

八月三十一日。

八月三十一日。

八月三十一日。

八月三十一日。

八月三十一日！

八月三十一日！

八月三十一日！

その文字を見た瞬間、私の脳内を駆け巡ったのは電流でも稲妻でもなくて、もっと冷たいものだった。

ああ、久々の目覚めだ。二十年ぶりの。全てを思い出して、全てを理解した。

そうだ、私は創造主だったんだ、この世界の。文字通りすべてを想像した主だったのだ。

二十年前、私は創造主、人間は神とも呼ぶが、それとしての限界を感じていた。創造主にも向き不向きがあつて、私は適性検査の結果ギリギリのランクで合格した落ちこぼれだった。しかも作った世界の出来は微妙だし。

約二十年後に滅亡することが決定した時点で正直心が折れかけていた。そんな時思いついたのが「一度人間として暮らしてみる」ことだった。創造主としての自我を手放し、一人の人間として自分の作った世界で暮らしてみること、何か滅亡を防ぐ手立てがあるのではないか、それをみつけることができるのではないかと思つたのだ。そんなこんなで二十年間一人の少女として生きてきた方がいいが、長く意識を手放しすぎたせいで、自我を取り戻す時間に誤差が生じてしまったようだ。九時間十五分もオーバーしてる。

まあ今更そんなことはどうでもいい。とりあえず明日あたりから、この世界のニュースは巨大隕石か宇宙人襲来のニュースでもちきりになるんだろう。いくら創造主といえども、滅亡は基本的にバグなので詳細な理由まで把握するのは至難の業だ。ましてや落ちこぼれじゃあな。はあ。でもまずはどう対処するか決めなきゃな。天才か英雄かでも生み出しとくか。

「終末だから選択しなきゃ」